

大阪大谷大学

平成三十年年度 入学試験問題（公募制推薦 後期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は、全部で十三ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の文章は、永井路子作『美貌の女帝』の冒頭の部分である。読んで、後の問に答えよ（字数制限のあるものは、すべて句読点等を含む。設問の都合上、原文の一部を改変している）。

誰が言いだしたのだろう。

「ひめみこの瞳はすみれ色だ」

と。幼い日からの彼女の美貌を、人々はそんな言い方で噂しあつた。細いうなじを心持ちかしげるようにして、少女が相手を見つめるとき、黒眸がちのその瞳の奥に、ふとすみれ色の翳がよぎるのだという。

「母君の阿閉皇女を黄金に輝くたわわな山吹の花とすれば、ひめみこは？」

そこで人々は口をつぐんでしまう。

「さあ……」

その美しさは花にたとえるにしては、藤たけすぎている。まだ十四歳にしかならないというのに、ひめみこ氷高は、みつめられた者が思わず顔を伏せ、ひざまずきたくなるような……そんな気品をそなえていた。

生まれついで血すじのコウキのゆえにか？

そうかもしれない。氷高の父は、草壁。壬申の戦の覇者、天武を父に、そして現帝持統を母に生まれた皇子だ。そして、母の阿閉は天智の皇女。が、すでにひめみこは父を失っている。彼女が十歳のとき、父は二十八歳の若さでこの世を去った。母の阿閉はいま三十三歳、太り肉の華やかな美貌の持ち主だ。女盛りのいま、衣の下にかくしもあえないほどの胸乳のゆたかさも、背筋をまつすぐに伸ばしたゆるやかな歩み方にも、夫を失った女の翳は感じられないが、その阿閉がふと顔をくもらせるのは、人々が、ひめみこの美貌について語るときである。さらに、

「あのお美しいひめみこは、どのようなお方と結ばれるのでしょうか」  
とでも言おうものなら、

「めっそももない」

阿閉は、禍々まがしい言葉でもへAへにしたように、むっちりした白い手を振る。

「そのようなことを言っってはなりません、そして……」  
声を低める。

「かりにも、ひめみこのへAへに、そのようなことを入れまいらせぬように」

人々は、なぜ阿閉が、そのときに限って憂いを含んだ表情を見せるのかを知らない。

ひめみこ氷高には、弟と妹がいる。弟の輕皇子かろのみこは三つ違い。蒼白あおい皮膚を持つ十一歳の少年は、ひよわたちである。病弱だった亡父ちちの資質をうけついでのかもしれない。

妹のひめみこ吉備きびはさらに三歳年下で、色も浅黒い活発な少女。父を失ったときに幼おきなすぎたせいか、かえって悲しみは彼女の上には落とさなかつたかにみえる。男の子にはおとなしすぎる輕に代わって、このひめみこが男皇子おとこのみこだったという声も聞かれな

いではない。そんな噂には、微笑してうなずいてみせる母の阿閉であったが、侍女たちが、  
「姉君とは違つたおかわいらしさで」

「大人になられたら、心ひかれる男たちがさぞや多くていらつしやいましょう」

などと言おうものなら、たちまちマユネをひそめるのである。もつとも、当の氷高も吉備も、母の周囲のささやきなど、知りはしな

い。  
モツカモツカの吉備の関心は乗馬にある。兄の輕が乗馬を習い始めた二年前、  
②「私も乗るの」

厩うまやの前から動こうとしなかった。

「ひめみこさまは、まだお早うございます」

侍女たちがなだめてもすかしても、

「乗るの、どうしても乗るの」

ガ<sup>d</sup>ンとして聴かず、ついに舍人<sup>とねり</sup>に馬の背に抱きあげられて馬場を一周し、やっと納得したという一幕がある。八歳のいまは、自分用の若駒もきまつて、むしろ兄より上手に跑<sup>たく</sup>足をうたせる。ときには、

「まあっ、およしなさいませ」

侍女が悲鳴をあげるほどの速さで馬場を駆けぬけてはらはらさせるが、伸びかけてきた黒髪をなびかせての疾走が吉備には何よりも得意なのだ。

——なのに……

彼女の不満は、こんなに巧みな乗り手である自分をおいてけぼりにして、兄が、大がかりな狩に行こうとしていることだ。

「私も連れて行って」

さんざんねだったが、

「お母さまのお許しがないから」

と兄は言う。そして母も、

「今度はあなたはだめ」

と許してくれない。

「じゃ、いいわ。帝<sup>みかど</sup>にお願いしてみるから」

吉備は小さな唇をとがらせて、イッ<sup>e</sup>ケイを案じる。そしてこんなとき、最も頼りになるのは、姉の氷高なのであった。

「ね、お姉さま、行きましょ」

帝というのは女帝持統。父草壁の母という意味では、お祖母<sup>ばあ</sup>さまだが、同時に母の阿閉の異腹の姉である。年の違うこの異母<sup>きようだい</sup>姉妹は、ほとんど全生涯をいっしょに過ごしてきた。阿閉が草壁の妃となったのも、その親しさから、どちらが言いだしたということなく、最も望ましい形で結ばれたのであった。

こうした絆きずなの強さだから、ひめみたちはお祖母さまになついている。女帝はじつは、  
③「深沈シシチントシテ大度アリ」

と評され、寡黙冷静、その度胸のよさを恐れられて<sup>ウ</sup>いる存在なのだが、彼女たち孫娘は、そんなことは知る由もない。ただし彼女たちの勘によれば、お祖母さまへのおねだりは、内裏だいりの正殿で政務についている間は禁物である。仕事が終わって、夕暮にその北側の寝殿に帰ってくつろがれて<sup>エ</sup>から——そこなら彼女たちの殿舎からも近いのだ。

玉石に軽い沓音くつおとをひびかせながら、手をとりあつて、お祖母さまの寝殿の階きざはしを上る。扉を押し、並みいる女官たちに、ちよつと眼くばせをして、そつと帳とばりの隙すまからまぎれこむ。

④「お祖母さま」

倚子いしにもたれていた黒い影が、燭しほくのゆらめきの中でゆっくりふりかえつた。無口なお祖母さまは孫娘たちにも、とりわけやさしい言葉はかけない。が、瞳たなに湛たえられたやわらかな光が、その心のすべてを物語っている。

⑤「お祖母さま……」

吉備はおそれもなく、その膝ひざにもたれかかるようにした。

その日のおねだりは、しかし残念ながら、功を奏さなかつた。吉備が手をかえへ B をかえて甘つたれたにもかかわらず、「遠いところだから」

「今度は、ふつうの遊びではないから」

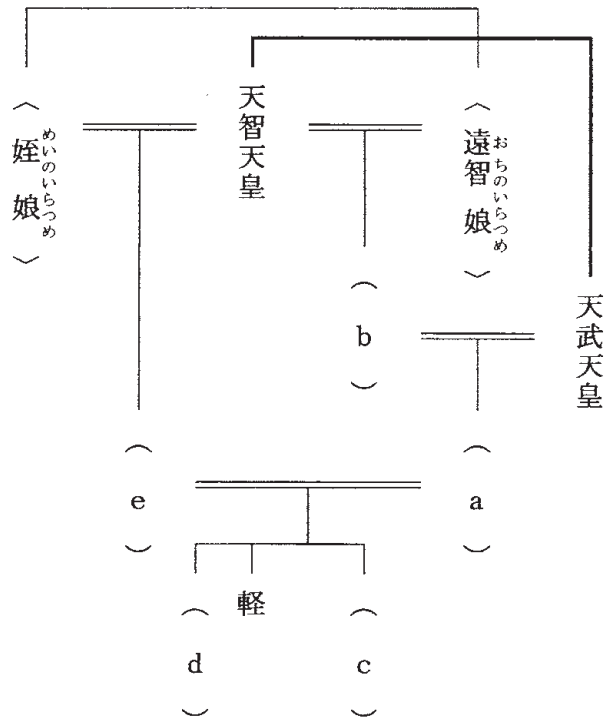
と、女帝は願いを容ゆるれてはくれなかつたのだ。

(注)

跑足をうたせる……馬に前脚を高く上げてやや速く歩かせる。並足と駆け足との中間の速度で走らせる。

問一 二重傍線部 a ～ e の片仮名を漢字に直せ。

問二 登場人物の関係をまとめた次の略系図の、空欄 ( a ) ～ ( e ) に入る最も適当な語を、本文中から漢字二字で抜き出して答えよ。



※ ( ～ ) 内は本文中にはあらわれない人物で、遠智娘と姪娘は姉妹の関係である。

問三 波線部ア～エの助動詞「れ」「られ」は、可能、受身、尊敬のうち、どの用法かを答えよ。

ア 感じられない      イ 抱き上げられて      ウ 恐れられている      エ くつろがれてから

問四 空欄へAへBへに入る最も適当な語を、漢字一字で答えよ。

問五 傍線部①「そのとき」とはどのような時か、本文中の言葉を用いて二十五字以内で説明せよ。

問六 傍線部②「私も乗るの」について、次の問いに答えよ。

(1) ひめみこ吉備がはじめて馬に乗って馬場を一周したのは、何歳の時だったか、数字で答えよ。

(2) ひめみこ吉備は、なぜ馬に乗ることにこだわったのか、次のア～エの中から不適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

ア 兄の軽皇子が馬に乗れるのなら、自分も乗れるということを示したかったから。

イ 天真爛漫てんしんらんまんにそだった吉備は、年齢も考えず馬に乗ってみたいと思ったから。

ウ 乗馬そのものに魅力を感じ、おとなしい兄に許されるのなら自分もしたいと思ったから。

エ 日常的に兄の言動に虚弱さを感じ、自分が乗ることで兄に奮起してもらいたいから。

問七 傍線部③「深沈<sup>シシチン</sup>トシテ大度<sup>タイド</sup>アリ」とは、誰の、どのような様子を評したものであるか、本文中の語句を用いて、二十字以内で答えよ。

問八 傍線部④「お祖母さま」、⑥「お祖母さま……」について説明する次の文章のうち、空欄  i  に入る最も適切な語句を、後のア～コの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

傍線部④「お祖母さま」は、持統天皇の部屋に入った孫娘たちの、持統への  i の言葉であり、傍線部⑥「お祖母さま……」は、誰に交渉しても許してもらえない  ii を認めてもらいたい  iii の、持統天皇への  iv の気持ち

- ア 軽                   イ 氷高                   ウ 吉備                   エ 阿閉                   オ ねぎらい  
カ よびかけ           キ おねだり           ク 狩への参加           ケ 乗馬の訓練           コ 姉妹の仲の良さ

問九 傍線部⑤「その心のすべて」とは、誰の、どのような心か、二十五字以内でまとめよ。

問十 この物語は七世紀終わりから八世紀の頃の藤原京・平城京を舞台とした歴史小説である。次のア～オの中から歴史小説ではないものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 天平の甍<sup>いらか</sup>                   イ 坂の上の雲                   ウ 村上海賊の娘                   エ 斜陽                   オ 阿部一族



二 次の文章を読み、後の問に答えよ（字数制限のあるものは、すべて句読点等を含む）。

批評とはある基準に照らして判断し、評価することである。これはよくてあれは駄目と分けることで、その意味のギリシア語の動詞 *krinein* から *kritikos* も *critique* も出てきた。世の中によいものは少ない以上、この仕事が出来ないものを駄目と言う方に傾くのもやむをえないことで、昔から批評と言えば悪口雑言、とまではいかなかったも酷評に近いものが普通だと思っていた。古いところでは緑雨、鷗外、露伴の「三人冗語」もそうだったらしい。ただし樋口 A の『たけくらべ』を褒めちぎったのは例外とする。

ところが今日ではこの酷評の方の批評がほとんど行われなくなった。その逆の絶賛ということも余り見られなくなって、映画か何か「絶賛上映中」などと宣伝される場合のほかは本物の絶賛も少なくなった。文学の方ではことに少ない。それで多いのは、いかなる基準があるとも示さずに、褒めたようで褒めていない、けなしたようでけなしていない、何やら評者の挨拶のような言い訳のような、<sup>①</sup> 我田引水風のおしやべりも混じった感想が批評と称して行われ、これで世の中が丸くおさまっている。この我田引水の部分が特に長くなつたものは評論と呼ばれる。そして評論をいくらかアッシュクしたものに本の内容の紹介を加えてこれから買おうか買まいかと迷う読者の便を図るものが書評と呼ばれる。ここでもわずかな例外を除いて駄目なものを駄目と指摘して酷評するような書評はまず見当たらない。

<sup>②</sup> これはなぜだろうかと考えてこのたび結論を得た。ここにホウコクするにも値しないことであるけれども、それは他のところでも述べた通り、今日ではほとんどの本や文章が、従って文学も小説もまず商品だからということで、そこから先はもう言わなくてもわかっている。以下はそのわかっていることなので、今更と思う「識者」の方々には読む方を省いていただかなければならない。商売に關係している方々も同様である。なぜなら以下のことは商売上の仁義の如きもので、これも今更ということになるだろうからである。

つまり悪口を言う批評が行われないのはそれが他人の商品にケチをつけることになるからであって、正面切ってそれをやれば営業妨害という物騒な行為とも取られかねない。商品とは人が自分の責任において自分の好きなものを買うべきもので、そこにはつまらない

ものを掴む危険もついてまわるが、そのつまらないかどうかも最後は蓼喰う虫も好き好きの問題になってしまう。それで、はたから余計な指図をするわけにはいかない。そういう虫はいないものとして、万人がその商品の品質の鑑定を求めるものとして、しかもその需要に応えるに足る鑑定人がいたとして、人は初めて一定の代価を支払って批評を手に入れることができる。そうでない限り、批評なるものがこの市場に現れることはありえず、万人、いや万虫が好き好きに蓼なり汚物なりを喰うに任せるほかないのである。

一般の商品の場合、『暮らしの手帖』その他が商品の品質、性能、使い心地などをテストしてコウヒョウすることが行われている。それができるのは、鑑定人が同業者ではなくて、しかも広告料を頂戴しない立場を敢えてとっていることによる。優劣の差も比較すれば明瞭に顕われる。さされるような商品の場合はその駄目なところが誰にでもわかる形で出てくるということによる。優劣の差も比較すれば明瞭に顕われる。こうして、物によっては蓼喰う虫の活躍する余地がほとんどないので、テストの結果はきわめて有益な情報となる。

小説という商品の場合には以上のことがことごとく通用しない。読者の大多数は蓼喰う人であって、ある鑑定人が重大な欠陥であると指摘するものが読者には魅力の根源であつたりする例は枚挙に暇がない。ある人にとつてはあばたが B なのであり、くさやが香気を発する美味なのである。それで太宰治なら太宰治の悪臭を指摘してこれは駄目だと言えば多くの人が色をなして怒る。まして同じことを現に商品として出回っている小説に対してやれば、それは悪意ある人間の偏見または特定の意図にもとづく誹謗と見なされる。敢えて行うことの利益はどこにもない。それよりも同業者が新製品を出せば「〇〇さん江」という花輪に相当するものを贈り、まづは褒めあげる。これを互いに行うことの方に利益があること位は商売にジウウジしている人なら誰でも承知している。つまり批評など出てくるはずがないので、同業者仲間の間の挨拶だけがさかんに飛び交うことになる。

今日では評論家にかわつて批評を行うのは I である。よく売れているものは市場が「よい」と判定したものであるから、専門家は安んじてこの事実を前提とした上で、そのよく売れている理由を説明することをもって批評に代える。あるいは評論をテンカイする。

そこで以前誰かが使っていた「相対主義の季節」という言葉が思い出される。いくら売れていても駄目なものは駄目という批評家の声はもう聞こえてこない。誰もがそんな II の物差しなどありえないかのような顔をする。それならばいっその辺で観念して、

市場の声は神の声、とまでは言わないにしても、市場が好むものは「よい」もので、市場こそ最良の判定者であると仮定することにはどうだろうか。長い目で見ればこの仮定は案外正しいのではないか。例えば百年経ってもさかんに売れて読まれるものはやはり第一級の作品であるとしなければならぬのではないか。今少し条件を緩めてもよい。百年経っても相当数の読者を見出すものは第一級の作者のものに限られていて、その読者の質も低くないとなればこれは間違いなく第一級のものとしてよい。私は予言者ではないから紀元二〇八〇年頃のこととはわからない。もしも今日市場で喝采をもつて迎えられている小説の中でその頃読まれるものが皆無であったとすれば、という想像は氣を滅入らせる。それとも、小説とは本来そういうもので、その時々市場で消化されて女子供を楽しませる以上のもではありえない、ということになるのだろうか。これはしかし一層氣の滅入る話である。

(倉橋由美子『あたりまえのこと』「小説論ノート」による)

(注)

緑雨……斎藤緑雨(一八六七〜一九〇四)。小説家、批評家。風刺・諧謔かいぎやくに富んだ評論・短文を著わした。

露伴……幸田露伴(一八六七〜一九四七)。小説家、随筆家。深い学殖を生かして、史伝、考証、評釈なども広く著わした。

三人冗語……森鷗外主宰の雑誌『めざまし草』(一八九六年三月〜七月)の書評欄。

蓼……タデ科の一年草。道端や湿地に生える。マタデは辛みがある。

暮しの手帖……一九四八(昭和二三)年創刊の雑誌。生活者の立場に立ち、広告を排除し実名をあげて商品を評価する「商品テスト」で、国民的雑誌となった。

くさや……開いたムロアジなどを、発酵させた塩汁に漬けて干した食品。特有のくさみがある。

小説論ノート……一九七七年から七九年にかけて新潮社の雑誌『波』に掲載されたもの。

問一 二重傍線部 a ｓ e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄

A

B

に入る適当な言葉を記せ。ただし、Aには人名を漢字で答えよ。

問三 傍線部①「我田引水」の意味として、最も適当なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。

- ア 自分の田に水を引くところから、自分の利益になるように、都合良く物事を行うこと。
- イ 自分の田に水を引けば他の人の利益にもなるので、自他共に栄えるように物事を行うこと。
- ウ 自分の田に水を引けば他の人に恨まれるところから、他者から嫌われるように物事を行うこと。
- エ 自分の田に水を引き他の人には分けなところから、他者の不利益になるように物事を行うこと。

問四 傍線部②「これはなぜだろうかと考えてこのたび結論を得た」とあるが、どのような結論を得たのか。本文中から十五字以内で抜き出して答えよ。

問五 傍線部③「他人の商品にケチをつけること」は、(i) 売り手(著者・批評家・書店など)、(ii) 買い手(読者)に対して、何をすることになるというのか。本文中からそれぞれ五字以内で抜き出して答えよ。

問六 傍線部④「蓼食う人」とは、どのような人のことか。次のア～オの中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- ア 多くの人が好むものを、自分も好きだと思ひ込む人。
- イ 癖のある蓼の味を愛し、好んで食するベジタリアン。
- ウ 駄目なものと評されても、自分の好みを優先する人。
- エ 評価されないものにこそ良い点を見つけようとする人。
- オ 苦味や辛みなど物事には癖がある方が良いと考える人。

問七 空欄 

I
---

II
----

 に入る適当な語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ（同じ記号は二度使えない）。

- ア 絶対
- イ 相対
- ウ 読者
- エ 観念
- オ 市場

問八 傍線部⑤「間違ひなく第一級のもの」の条件を、四十字以内で説明せよ。

問九 傍線部⑥「気を滅入らせる」、傍線部⑦「二層気の滅入る」とあるが、気の滅入る原因はそれぞれ異なる。それぞれのような事態に対して、気が滅入ると言っているのか。(i) 傍線部⑥、(ii) 傍線部⑦として、次のア～オの中から、あてはまるものをそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

- ア 「市場」こそが小説の善し悪しを決める基準だということ。
- イ 今日の小説には質の良いものが全く存在しないということ。
- ウ 百年たつても多くの読者がいる小説があるということ。
- エ 小説の本質がその場限りの娯楽でしかないということ。
- オ 評論家が誰をも傷つけない無難な批評をしていること。

問十 筆者が述べていることとしてふさわしくないものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 文学作品は商品になってしまったので、市場で本物の批評を手に入れることは難しい。
- イ 商品である小説の欠陥を指摘することは、営業妨害および個人の嗜好の否定につながる。
- ウ 読者は、文学作品の質に留意し、鑑定のプロの意見を尊重して本を選ばなければならない。
- エ ある基準に照らして、よいものはよい、駄目なものは駄目と指摘するのが、本物の批評である。
- オ 本物の批評がなくなっても、市場で長い間その作品が読まれ続けるならその質はある程度保証される。